

號七第卷壹第

佛説無量壽佛名號利益大事 因緣經に曰く

世尊阿難に告て曰く、如來の世間に興出し給ふ所以は彼の佛の不可思議功徳の光明名號利益大事因緣を説かんが爲なり。此故に我れ説く値難く見難く聞難し、若し衆生ありて此法を聞くことあらんものは皆應に信順して如法に修行すべし。

世尊阿難に告て曰く彼の法藏比丘十方世界の一切有情を度せんが爲に超世の願を起し無量の大行を修すも雖も是れ本久遠實成有法身常住の無量壽佛にして不可思議の威神力を以ての故に十方世界に遍滿して無数の有情を教化し安立せんが爲に無上眞實の道に住して或は利國王轉輪王となり或は長者居士豪貴となり或は六欲梵天王等となり或は地獄餓鬼畜生修羅身となり常に四威儀を以て一切を化作し給ふ。

阿難彼の久遠實成有法身常住の無量壽佛は豈異人ならんや今日の世尊我身是れなり。

慈悲の如來に便りなされ

山崎 辨榮

世に獨りの如來の在りますことを識らずして人生を闇の中に過して又、闇に入る人は不幸なるものはありませぬ。人の子が親を離れて成長することの出来ぬ如く、我等の靈性も如來を離れて育つことは出来ませぬ。

愚痴はわが同胞衆に對して遺る漸く迷ひる子等を慰れ給ふミオヤの思召を御傳ひ申したいのであります。慈悲深き如來が此の可愛き子等に一日も疾く相逢ふて聖意に契ふ様子を致したく思召給ふことは聖典に示されてあります。同胞衆は慈悲のミオヤに御逢はせ申したいと云ふことに就て、楞嚴經の勢至菩薩の圓通の告白を紹介いたします。是は勢至菩薩がミオヤの在りしことを深く御慕ひ申されたる御因緣であります。釋尊が一時舍衛國の祇園寺に在して首楞嚴經を御説きなされ、如來甚深の妙理を演べて衆生の心の本源を明

し給ふた。後に世尊は普く會中の諸の菩薩や羅漢らに向つて斯様に告命られた、今汝等は現に悟りの花開き實を結びておるが、其に就ては過去何れの處にて何かなる法を聞いて其が聖種となつて今現に斯く證りの身となられしや、入門の因緣を罪會に向つて告白せられよ。爾る時其を聞いて初心の靈性を啓發する助縁となるからどの如來の命を蒙りて、第一番に最初の弟子なる釋迦如が先に法を聽き入門したた因緣を告白いたし、第二十五番目に親音の圓通を得た告白が最後なので、今皆さんに紹介します勢至菩薩は第二十四番目であつた。左なまでに自己の胸中に彌陀の慈悲に充てたる如きの信念を世の同胞衆に類らたき勢至菩薩が此の聞き機會を争てか駁して居らるべき、彌陀の恩寵に動されたる勢至菩薩は、其の從へる所の菩薩等と共に座を起て世尊の御前に進み出なされた、其莊ひは實に威めしく紫雲の色鮮かに六八の相清く百福を以て人格を莊嚴し、其麗しさと輝きは四邊に輝きわたたり。佛の足を頂禮し恭敬合掌して丹果の唇を

— (2) —

を動かし類物の聲を發して佛に白し上げた。

世尊よ、我過去の恒沙劫の昔を憶ふに、佛世に出給ふより念佛三昧の法を授けられた。念佛三昧とは如來は一切衆生の大慈の父に在り、衆生は悉くその子である。さればミオヤは常に愛子を慈念し給へども、子の方に於て逃げ隠れて居る時は何とすることが出来ぬ體へば二人の中に於て甲の一人は専ら乙の人を想ひて乙の人が慈しむ申の心を憶ふことなく、片念ひにて相逢ふ親しむことは出来ぬ。兩方互に相憶ふてこそ相親しみ得らる、如く、如來は實に衆生のミオヤに在ります。常に迷子なる衆生を慈みて寸時も憶ひ給はざる時なきも子の方に於て逃げ去る時は相逢ふこと能ぬ。如來の衆生を慈念することは母の子を憶ふ如くである。いかに慈愛深き母が子を忘るゝ間なく憶ふも若し子の方が母の許を逃げて遠く離るゝ時は如何とすることができぬ。子が若し母を憶ふこと母の子を憶ふ如くなれば、母と子とは生を離るゝも相違は

乞食の爲に扱帶されて仕まつた。いかに愛性の種でも立派な家に生れた子でも飢に逼れば乞食の子と異つたことはない、幾年月の久しきに竟に乞食乞食と化してしまつた。全體少年の功名心や虚榮心と云ふものも現境から養はるゝ故に起るものである。然るに乞食乞食となつて家庭の驚愕なき兒には其日々の食を求むる外に何の希望も起るものではない、憐れ人非人の見とじて路傍に乞まなければならぬ身となつた。爾しながらいかに乞食を爲ても心の奥底に潜みおる人間の本性は有である。十歳ばかりの折に富貴の家庭に育てられた童兒等の秩序ある遊びを見て初めて内心動き出した思ふた、彼の子さんたちも我も同じ人間である。然るに彼等が頼る親が人にならぬものも子供自分の力では無いから残念ながら非人を以て甘んじなければならぬ併し自分人間である親のない譯はない、願うが親が欲しいと、初めて親を心から尋ねる心が起つた。今まで久しい間違しも心に浮はざりし親を心の底から初めて

で相逢ひ相見ることを得る如くに若し衆生の心にミオヤの佛を憶ひ佛を念じて忘れずば若しは現前にも當來にも必定して佛を見奉り佛を去ること遠からず、方便を假らずして自ら心開くことが出来る。譬へば香に染まる人の身に香氣あるが如く之を則ち名けて香光莊嚴と云ふ。

我本因地に念佛の心を以て無生忍に入る、今此の界に於て念佛の人を攝して淨土に歸せしむ。佛圓通を問ひ給ふ、我れ選擇することなく都て六根を攝して淨念相繼つて三摩地を得る、斯を第一とすとの勢至菩薩の御詞を布衍して更にお話いたします。

焉に家富みて族性の貴き家庭に於て一人の男子あり常に温かき慈母の抱養の下に掌中の玉と愛ではやされしに、頑是なき孩兒は花に戯むる小蝶の跡を追ふて諷らずに門より出て郊外に歩行、其ゴム人形の如くに隨はしき兒の狀はそこを通る乞食の眼に映つた、すると乞食は坊ちゃんあなた様欲しくば私が捕て上げます、私が連れて往きませうと頑是なき孩兒は驚に

考へるやうになつた。思ひを潜め心を解めて能く考へると夢初め如くに四五歳の時の慈母の懐かしき容の浮び出し、サア夫が云ふもあはれ何にもして親に逢たくてもう食ふことさへも忘るゝ程に爲つた。一方に又、母の方にても今頃我子は何處に何うなつて居るやら片時も忘るゝ間はない、縱令何程財宝が山に積ても之を譲るべき子は居らずいかに學に勤む長じたるも之を憐る子なくては家にも身にも生命の相續なき心地して寂寥に耐らる。夫とて元より子のないならば歸らぬ身も子はあるのに親の物を子の有とすることが能ぬとは實に歎息の至りである、久しき間母の方では子を憶はざる際なきも子供の方よりは母を念ふことなべて忘れざるやうになつた、そこで母が子を憶ひ子が母を念へて兩方の憶念が専らにして餘念なきに至れば縱令千里の道を隔ても宛然として感應し相逢ひ相見ることを得らるると云ふことでもあります。此の變の如くに我等は心靈のミオヤに在りしことを識らず、開よ

— (4) —

り間に迷ひたる乞食の便りなき身となりて六道の徧に彷徨たりしに、念佛三昧と云ふミオヤに相逢ふ法を開て、ミオヤの慈悲を念ひ一心に達したいと念ひ慕ふて止まざる時は彷彿として現前にも又、當來にも相逢ひ奉ることを得ると、若し大慈の温顔を拜む時は又、慈悲の聖意をも窺ひ奉ることを得ると、我等が初めてミオヤの聖名を聞たりと云ふもの、實には久遠劫に別れし直實のミオヤ、現今はかにも逢たてまつることを得れば、我れ本ミオヤの子なれば靈性は本有の自性である。實には此身の生れた時に初めて生れたものでなく、ミオヤと同じく本來無生にして永劫に又、滅するものでなき眞理を悟るを即ち無生忍と申します。

勢至菩薩は如來と本來の親子なれば只々親を憶念ひ、親念ひの一心によりて親に逢ひ奉り無生忍を悟りなされた。夫からと云ふものは何れの處にも何れの人に向つても唯ミオヤを念せよ、ミオヤを離れては佛になることは出来ぬと云ふ、ミオヤの聖意を都て傳へてミオヤの御許に歸るべき法を以て勸めなされた。之を念

聖善導大師傳

佛陀 禪那

釋云ケ。師に問ふて云く吾が禪定の力にて即身に三界を離るべきや否や、師曰く佛を去ること既に久し今時の人禪定を修しても心濁り易くして無漏の聖法顯はれ難し、心を禪門に安くと雖も輕く三界の牢獄を出ること難し、復問ふ然らば何れの行か成じ易きぞ、答て

佛三昧と申します。吾が同胞來よ、天にも地にも禪り等と云ふ、慈悲深きミオヤの在すことを信じられし哉、南無阿彌陀佛とミオヤの聖名を稱えて一心に念じ奉ればたとへば體ひことではできずとも慈悲のミオヤに常に離れぬやうに想はれていかに精神的生活を豊く高し、懇精となり活動の力と爲るの實には不思議なものであります。人生是れ程大事なことではありません。眞實にミオヤを便り給へよ、ミオヤを信じてこそ初めて人生の眞理を悟ることを得るのであります。斯やうなことで慈悲のミオヤに便りなされど御勤め申すのであります。

○寶地壇
後の世に心うつる佛には
眞のいさこも照りこまやう
○寶地壇
ひきしめて結ぶ佛に
或の池に澄みわたるいな
○寶地壇
我が師の松風を音にして
玉の積木にひきまきりつ

曰く西方極樂の行は佛末の時も甚だ成じ易し、釋迦教へて曰く無量壽國は往き易く修し易し、然るに人修行して往生すること能はず。又、千福寺の懷感禪師は自己の修學することに執心強停にして精進刻苦して師に從ふ。義が神に入らざれば以て得たりとせざりし、去れば四方の好學者が就くこと夥の如く衆れり、唯念佛少時にして還に報土の淨土に生ずると云ふこと信じられぬ、疑水未だ解けざれば遂に師に請して其の疑團を解かんとす。師の曰く予は能く教を傳じて人を度す、信じて後請するや社々として講すること無しと爲んや感師曰く諸佛の誠言信せんば講せず。師の曰く若し然らば念佛往生は佛説にして魔説ならんや子若し之を信じて至心に念佛せば當に證驗あるべしと。

乃て感師は大師の教示に依りて即ち道場に入りて念佛するに何の靈瑞をも親ざりし、感師自ら罪障の深きを恨みて食を絶ちて命畢らんと欲せしかども大師許し給はぬ。遂に精進にして三年間念佛して後、忽ちに靈瑞

を感ず、金色の玉毫を見て便ち念佛三昧を證得なされた、自分が宿世の培業重くして妄りに學解を以て眞の佛法を求めたる過なるを發露懺悔して爲に群疑論七卷を編述せられた。

大師は古來、觀經の疏義多くあれども全く經の宗教を眞實に發見されておられぬを歎きて自ら三寶に祈り靈瑞を感じ正しく佛の指示を蒙りて觀經の疏四卷を著して彌陀の願意釋尊の本懷を顯示なされた。此の觀經の疏を著すに就て一切三寶の加護を仰ぎ奉るに夢の中に諸佛菩薩及び雜色寶山光明等の靈相を感じ、毎夜夢中に常に一の僧ありて玄義の科文を指授し給へしが既に了りては更に復た見えざりしと。

又往生の要行を明して將來を寤さん爲に法華讀二卷觀念法門、往生禮讚、般舟贊各一卷を著し給へり。大師堂に入ては合掌胡跪して一心に念佛力の竭くるにあらざれば休み給はず乃至寒冷にも亦汗を流すを以て其の熱誠が現はれぬ。出ては即ち人の爲に淨土の法

鉢自ら洗ふて他人の手を煩すことなし。平生常に乞鉢を樂みて毎に自ら賣て曰く釋尊さへ分衛し給ふ、善導何人ぞ居ながら乞鉢を受くべきぞ、又沙彌までも禮を受け給はざりし。諸の有縁を化する爲に毎に自ら獨り行きて衆と共に行かば、世事を談じて念佛の妨げになることを恐るればなり。若し暫くも相見を請ふ者あれば聞かひるに法を説き或は道場に於て親しく教を爲し、或は會て念佛の法を少しも見聞なき人の爲には教義を披辱せしめ或は他に教て其をして亦他に展じて淨土の法門を授けしむ。

を説て諸の道俗を化し道心を發し淨土の行を修せしめ暫時も利益を爲さざることなし。三十餘年別の經所なく暫くも睡眠し給はず、洗浴の外は會て衣を脱がざりし。常に行道禮佛等を以て己が任とすし給ふ。能く佛の戒品を護持して毫も犯し給はず、嘗て目を擧て女人を視給はず、一切の名聞利養の心を起すこと無し。又、綺詞戲笑杯杯を爲給はず、所行の處には自ら節約にて清淨自活飲食衣服の四事豊富に供養を受けても夫は皆自身に入れ給はず並に乞に施し好味食をば大厨に送りて徒衆に供養し自身は只惡惡の食を受けて穢に身を支ふことを得、乳酪醍醐の美食をば飲嗽し給はす。

諸の信施を受けては阿彌陀經を寫すこと十萬餘卷、盡く所の淨土の變相三百餘格を散施して受持せしむ。故に京師より近郡に至るまで經を誦み佛を念ずるもの迹を隨て絶へず。至る處の破壞の伽藍及び故墳塔廟を見ては皆悉く營造修復し給ふ。佛前に燈明を献げ常に絶えず又、三衣

のなし、精進する人多きが故に肉の賣れざるは善導の勸化に依る、因て善導を殺せんとて刀を持ちて寺に往き竟に大師を害せんこと、大師之を見て毫も怖れず西方を指示し給へば空中に淨土の相現はれたり、寶藏之を見て便ち發心し身命を捨て、淨土に生せんことを求め自ら高樹に上り阿彌陀佛を念すること十聲、樹より落ちて終る、時に人、化佛の天童子を喚ひて寶藏が頂門より出るを見たりと。

又或人大師に問ふて曰く念佛の善淨土に生ずべきやと對て曰く汝が所念の如くならば必ず其の所願を遂ん、對ひ曰て大師自ら阿彌陀佛を念すること一聲すれば一道の光明其口より出づ、師彼に問て曰く此身願ふべし諸善逼追す、情偽戀身して暫くも休息なし、吾將に西に歸らんとすと、乃ち寺庭の柳樹に登りて西に向ひ願じて曰く願くば佛の威神を以て我を接し我を助けて我が此の心をして正念を失はず彌陀法中に於て退かぬと、時ざれば、願じ畢て其樹上に於て端身立化し給ふと。時

は餘り知られて居りなかつた。併し總本山知恩院の山下
管長、増上寺、堀尾正各本山及び高僧領學の間に
非常な尊敬されて居りました。昨年お亡くなり
の當時知恩院及増上寺に於て兩山の住僧多數相會し盛
大なる追善回向が営まれました。尙今般一周忌法會を
營むに當りまして管長現下及び増上寺、黒谷、百萬遍
の各御法主より御染筆の色紙御下附になりまして深く
感謝し、併せて茲に報告いたします。昨年當山に於て
岩井上人傳燈師として五重會が勤まりました。其際岩
井師の御話に今より十二年前に本山の指命を帯びて當
山へ来た其の要件は元祖上人七百年御遠忌執行に就き
記念のため「華頂諷要」と云ふ本を發行することに
なりました。是は元祖大師七百年の昔吉水の草庵に於て
佛宗御開創の當時より今日迄の沿革史を畫したもので
あります。此の著述を故淺井上人へ御依頼になる爲に應
々々來問したのであつた。

故淺井上人は自己の長所を廣告せざるのみならず人の
短所を指摘されしことは絶て聞きませんでした。此の
一事を以て師の人格徳性が推知されると思へます。
師は又知恩院の寶物整理、古文書の調査等の任に當つ
て居られましたから毎年八九兩月間は本山へ結切つて
居られました。尙、加行中の教誡師として本年十一月
の二ヶ月間本山へ居て行僧を教誡し督勵されました
師は大正六年現代僧俗の信仰を振起せしめんと欲して
山崎、土屋兩上人に謀り、知恩院勢至堂に於て別時念
佛三昧會を創設されまして爾來年々三月一日より七日
まで辨榮上人御導師の許に各地の信者相集り熱烈に
念佛三昧會を嚴修しつゝ來て居ります。此の清行は漸
次に波及して今や全國各地に念佛三昧會が盛んに行は
れつゝあります。師は大正三年實兄故淺井順孝師追帯
以て辨榮上人に師事し又、他をして上人の教化を享け
しむべく多大の便宜と援助とを與て下さいました。辨
榮上人を我が新潟縣へ御歸らせられて今日私共が上人
の御化益を受け得たのも偏に故淺井上人の賜でありま
す。淺井上人のごとに就ては之に位に略して置かして
私と淺井上人との關係を少しく申上げます。

— (13) —

私は宗旨違のために同市に住みながら殆ど師のあるこ
とを知らぬ位でありました。偶々恩恵が大正五年病に
かかり其當時相州葉山に療養して居りましたが、段々病
は篤くなり今年半の生は保つまいと云ふ醫者より所謂
死の宣告を受けたのであります。乃で私は生者必滅
は世の習だから仕方はないが、せめて精神に慰安を興
えて終らせたいと思ひました。之には何か良法はなきか
と種々に心を砕きました。之には何うしても宗教に依
るより外はないと考へました。併し未だ二十歳前後の青
年に對してお前は兎も落ぬから佛を信せよと云ふ御
念佛を稱えよと云ふことは反て彼に氣落をさせる様
なものである。何うしたものか實は困つて居りました。
た。然るに求むるものには與らるゝの道理にて其後兩
三日を經九若菜先生のお宅へ參りました。所が先生頻
りに阿彌陀様の畫像に向つて拜んで居ります。當時若
菜先生も私も信仰杯は更に解せぬ時代でありましたか
ら私は異様に感じまして貴下はどうか佛様を拜む氣
になりましてか聞きまして先生の云々、實は未
だ信仰が云々程でもないが此程辨榮上人と云ふ高僧
の御説教を聞きまして其の意味が能く解らぬ
併し何となく難有く感じしたので五日間參詣しました。

乃で上人に拜謁し斯く御説教を拜聴して居ても自分の
至らぬ爲か上人の御説が能く了解されませぬ、どうし
たらば解りませうかと御尋ねましたら上人の仰り
るに佛様を畫して上から之れに向つて朝夕御念佛申
して居なさい、さうすれば自然と如來の大慈悲に觸れ
て解るやうになりなす。と仰られましたから私は斯う
して念佛を申して居ります。と御話でありました。し
て其の佛像を拜するに云何にも慈悲圓滿の相が溢れて
居ります。私は非常に悦び此の佛様を恩恵の方へ送つ
て床に掛け置く時は自然に信仰心も萌發し心に慰安を
興えて下さりであらうと信じ早速淺井上人に而會し辨
榮上人の御染筆を願ひました所が早速御畫下さいまし
た。私は其を持參して葉山に至り恩恵に示した所が不
思議にも非常に悦びまして已來之を朝夕拜み且つ御念
佛申して居りましたが遂に信仰の人となりまして意想
外でありました。
恩恵は大正六年七月十三日亡くなりましたが臨終には
心に何の煩ひもなく只々佛の御救を悦ぶの外何の望み
もなく、眠るが如く正念にて往生を遂ました。隨つ
て肉體に毫も苦痛を感せず安穩に終りました。其を見
て居つた兩親の喜びはいかばかり、送葬の際にも零

— (14) —

す涙は憂鬱の涙でなく歡喜の涙でありました。併て喉
元過れば熱さざるの聲に濡れず、元佛の眞味を解
せざるは佛の御慈悲も殆ど打ち忘れて居りました。
然るに其年十月又、若菜先生の處へ參りました所が先
生の云はるゝに、法藏寺様から辨榮上人の著された宗
祖の皮簡と云ふ本を戴きました。讀んで見ても解らぬか
ら法藏寺さんから講義して貰ふではないかと相談を
受けましたから早速同意して其より兩人共十六日間毎
夜引續き二時間づつ講義して頂きました。茲に於て初
めて人生と宗教とは密接の關係あるものなることを察
知いたしました。孔子が朝に道を聞て夕に死すとも可
なりと呼ばれたのもさうだと感じた。苟も生を人類に受
け、人たるの道も辨ず、人生の歸趣する處も解せざら
ば動物と異なる所はないと自覺しました。
全く私の信仰に目覺めさせて頂いた其の遠因は恩恵の
病死でありましたが直接の動機は此の本(宗祖の皮簡)に
依り淺井上人の講義にあつたのであります。尙、幸にも
其年十一月八日に土屋上人御來問になりまして同意味
の御教化下されたので一層深く印象を留めて頂きた
した。此の(宗祖の皮簡)に付ては同様の話があります
今回京都に光明會支部を創設されました醫學士恒村京

八君は永年佛書を研究し佛學に精通して居られまし
たが未だ宗教の生命たる信仰に入ることが出来ずして
非常に煩悶して居られました。偶々或人より宗祖の皮簡
一部を恵まれ一讀して恰も朝日に濃霧の晴れたる如く
日頃の疑團一時に氷解して今や如來の慈光に接して歡
喜の生活に入ることを得たとの告白がありました。
此の三月知恩院の御別時に同君及び工學士中井常次
郎君等と共に一周間念佛しましたが君等の信仰の熱烈
なること實に驚嘆するの外はありません。其他此の書
に依て信仰に入りしもの幾許あるか知れませぬ。
私と故淺井上人とは僅か二ヶ年餘りの道交に過ぎませ
んが其の交情の密なること兄弟も當ならず、御存命中
は殆ど隔日に往復して教を受けて居りました。私を
信仰に活かして下さられたのは山崎上人の御啓でありま
すが此の淨界に手引して下さられたのは淺井上人の賜で
ありまして深く感謝して居ります。故に私は淺井
上人の亡くなった時は恩恵を亡くした時よりも全
く失望いたしました。終りに臨みまして山崎上人及び
土屋、淺井兩上人の御恩の萬一に報んため、倍々信根
を培養し、如來の慈光に浴して以て諸君と共に手
を携ひてや才木の御許に辿り進んことを切望致します

— (15) —

正誤

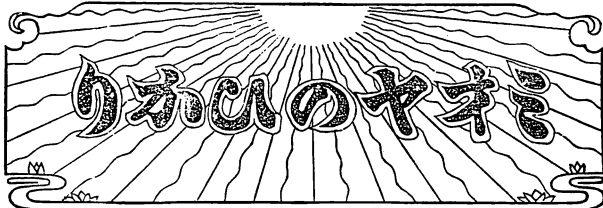
本誌第六號三頁上、最尊の威權者は權化の誤り
同十二頁下、見ぬ人のほの誤り、同十三頁上、無貫
の罪は實の誤り、同十三頁下、雙手でははの誤り、同
迎ひたるはへの誤り、同音項が幸ぞは等の誤り、同一
生造悪返りは限りの誤り、同好日の清遊は月の誤り

謹告

印刷所多忙の爲め原稿は前月中に締切り印刷所へ回し
置かざれば其月の發行日に間に合致すから御寄稿下
さる方は例へば六月號に記載の文は五月二十日頃まで
當所へ着する様に御送り願ます。尙寄稿家諸士に申
上で置きます、御覽の通り十六頁の小雜誌ですから長
文の原稿は遺憾乍ら掲載いたし兼ねます、相成るべく短
文に御願致します。

— (16) —

○誌料 一ヶ部 前金五錢 郵税五厘
二ヶ部 前金十錢 郵税一圓
○廣告料 五號活字廿四字詰一頁前金五拾錢
半頁金五圓(一頁拾圓)前納(專事)
大正九年五月十五日印刷 (一回發行)
編輯人 中村 禪定
發行人 秋場 熊太郎
印刷人 千葉縣東葛飾郡新小岩町二丁目
發行所 光明會松戸教會所
千葉縣東葛飾郡新小岩町二丁目
振替東京四三九八會



號八第卷壹第

顯眞法印の消息文

我れ佛を念すれば佛、我を照し給ふ。光明我を照せば罪障消えずと云ふことなし。

藥王樹に觸るゝものは毒なれども藥となる。光りを蒙らんもの、誰か罪障のこりあらん。

斯ばかり易き行を無数劫の間、思ひよらざりける悉しきよ。時過ぎたる智慧判定を惜せんよりも、利益現在なる、光明名號を稱念すべし云々。

◎我等が教のミオヤ

山崎 辨榮

○法身の不思議

宇宙全體が法身なる大ミオヤに在り、然し佛敎は哲學と宗教との兩面より宗教的關係を説明してある。宗教の客體なる法身をも哲學的に觀する時に宇宙の實體即ち理體と觀て眞如と名けてある。哲學にて眞如と名くるものを宗教にて法とて絶対人格のミオヤと信じてある。哲學は宇宙の實體を知りたいと云ふ知識の要求を満足する爲にて宗教は我等生命ある人類の根本なること、救済の主と仰ぐ。故に其客體なる本尊は絶対なる人格と信せざるを得ぬ。佛敎の學者にて哲學的に觀るべきと宗教的に見るべきとの區別を混してある故に吾人が宗教的に大ミオヤを説くを聞いて基督教にかぶれておる杯と云てある輩がある。彼等は自ら活ける信仰心なくして冷たい思索にて言教文字の因襲に囚は

れて居る、彼等には逆ても全宇宙に活けるミオヤの恩寵の光明の溢り居るを感ずる性能がないから彼等には活けるミオヤを信することは出来ぬ、死したる文字のみに佛はあると思つて居る。吾人がミオヤに活かされつゝある信仰心を以て觀する時は宇宙萬物の中に絕對的に尊とひびき響き活ける存在を信せざるを得ぬ。天地萬物アナタの御惡みに成れる物にてアナタの恩寵は一切の處に充滿するを感ぜざるを得ぬ。我等は大ミオヤの如來藏なる胎内より産出されたる子である。現に吾等は靈に活かされつゝあり、其のミオヤは絶対人格と仰ぎ信じて居る。

實に不思議——世に不思議と云ふ中に宇宙の秘密藏程不思議なるものはない。實に絕對に奇妙不思議である宇宙の秘密藏は我等が肉眼では其の内面を窺ふことは出来ぬ、宇宙は吾人の肉眼に映する皮相より見て天に日月星辰の運行あり、地には起伏懸崖生成滅化極まりなき生物あり吾人は内蔵より發現せられたる現象界即ち娑婆の舞臺の方だけを以てても實に奇妙不思議に驚

— (2) —

嘆せざるを得ぬ。世に謂ゆる造化の妙用と云ふ、實に妙用である。天地萬物即ち凡ての動物や植物等は何なるもの、手に依て造化せられしや又、産出せられしやは大ミオヤの絕對大なる物に比ぶればミオヤを産することも出来ぬ赤兒のやうな吾等には萬物造化の妙用の本源は解らぬ。實に此の靈對の大ミオヤの内面は凡夫の測り知ることは出来ぬ、内面なる樂座の裡は此の舞臺の表から窺ふことは得られぬ、實に大宇宙の不思議なることは彼の怪力亂神を語らぬてよ孔子さへも天何をか云はん、四時行はれ百物生ず、又上天の載は音も無く臭もなし又、君子の道は費にして感なり等の言は孔子が宇宙の不思議なるを歎じたる語ならん。ペーコンが哲學は少しく學ぶ時は無神論に陥るべけれど深く研究する時は實に九蒼無窮の玄深高遠なるを認めれば人智の甚だ微にして數ならんことを感して無限者に對しては只、畏敬服の外なきに至ると、實に宇宙は不可思議である。大ミオヤは赤子の滴知すべきでない只畏敬すべき外はない。

たる一の頭腦である、全宇宙の大脳に比して大海の一滴も何とも比較は出来ぬ微少な頭腦であるけれども此の少なる頭腦の内に無量の事物を印象し貯蓄してある。世に博識強記の頭には時間的には長く古今に亘り空間的には廣く世界の事物を見聞して印象し記憶して之を包含してある。李博士萬卷の書を懐にす、其の頭腦に秘藏してある意味である又、天才の藝術家の頭がら奇々妙々の文句などを無盡に遣り出して居る、人間の少なき頭腦からヘスの如し、況や無量無邊の一切表生の頭腦の一大根源なる宇宙全一の法身の腦に於てをや久遠劫の昔より盡未來際迄の未なきまでの一切の現象、若しくは一切の人類心依正の萬物を自己の内面に容納し存在して常恆不斷に千變萬化の一切の事物を現出して盡ることなき宇宙一大頭腦は不可思議の淵源と云はざるを得ぬ。(未完)

宇宙の母胎——宇宙の本體なる大ミオヤは萬法の原因として法身なる天の父に在ります。ミオヤは唯一なれども内容の秘密藏よりの胎内より一切萬物を産み出す邊より見れば如來藏と云ふ母である。日月星辰及び一切萬物は不思議の如來藏より産み出されたるのである。如來藏の胎内から産出されたる萬物は實に無量無邊である。密敎にてビルシヤナ佛を一方よりは金剛界の大日と呼び一面よりは胎藏の大日を名けて居る。大ミオヤの秘密藏の胎内より一切の衆生を産出す。故に母と云ふ意味に見たらば興味がある。

宇宙の大頭腦——或學者が人類の精神は頭腦に在ると曰く、宇宙全體は精神であつて物質である、故に絕對的に大なる頭腦である。故に人の頭腦を組織する石灰質とは全く別の性質ではないと、實に不思議である。吾人の頭腦は宇宙大頭腦の一分子である、されば吾人の頭腦はいかに少なかるも本、如來藏から産出されし面して夫を縮少せし所の分身である本、宇宙の大頭腦より産出され

— (3) —

孝明皇帝の靈夢に就て

佛 陀 禪 那

嚮に中華佛敎の曙光を題して佛敎が始めて漢土に渡り來りし時に後漢の孝明皇帝の靈夢に感じたる丈六の尊容、眞金色にして圓光徹照して威神尊嚴なる靈相の啓示せられしことは是れ正しく東亞半世界のあらゆる人の心の本尊として觀想し奉るべき表相と信ずることを演べたり。

如來は本、法身大智慧の相にて十方法界一切の處に周徧せざる所なし。故に機縁熟する時は何れの處にても應現の靈相を感すべきである。然して總令夢になりとも一度此の靈感を得たらば其は全く如來の實在の一分を啓示せられしことなれば自己の心の本尊として其の被相に依りて常に自心の制裁と爲り指導となり心靈を靈的活躍の原動力と爲り、無限の泉源となりて宗教心を活すものである。法華毒藥品の意に依れば唯、形の方にのみあくがれて居る人の爲には此の世界にては

— (4) —

佛説尸迦羅越六方禮經

中村生

佛言はく、之を聽け、内心中に著よ、其れ長者諸人ありて能く四戒を持ちて犯さざる者は今世には人に敬はれ、後世には天上に生せん。一には諸の群生を殺さず二には盜まず、三には他人の婦女を愛せず、四には妄言兩舌せず、心に貪慾悲愆癡癡を欲せば自ら制して聽くこと勿れ。此の四意を制すること能ざるものは、惡名日に開えて月の盡る時に光明稍く冥きが如し、能く自ら惡意を制するものは月の初めて生ずるに其光り稍く明かにして十五日盛滿の時に至るが如し。初めに「之を聽け内心中に著よ」とは釋尊が彼尸迦羅越に對して汝心を著付けて一心に聽けよとの御注意である。觀經の初にも釋尊が耆提希夫人に對して歸に聽け善く之を思念せよと仰られてある。心に在らざれば見れども見えず聽けども聽えずで心

第二に盜まずとは五戒中の不偷盜戒、之とても心慈悲に住すれば盜めども勤められても盜むことは出来な、のみならず他に物を恵み他の苦を救て遣りたいと云ふ慈悲心が生ずるでせう。第三に他人の婦女を愛せずとは他人の妻に對して戀慕の情を起さぬと云ふことでもあります。自分の妻を裏心から愛して居れば他人の妻に思ひを掛ると云ふやうなことはあるべき筈がない。之も慈悲心が本である。第四に妄言を云つては人に迷惑を掛け、二枚舌を使ふては人の和合を傷ると云ふやうなことも有り慈悲心が缺けて居るからで有ませう。一度慈悲心起れば自ら善言を以て人を度し、愛語を以て人を悦ばしむると云ふ様になるのは當然で有らふと思ふ。心に貪慾悲愆癡癡を欲せば自ら制して聽くこと勿れ。貪は貪欲と熱語して非理の慾望であります。只に欲と云へば欲には正欲あり邪欲あり善欲もあれば惡欲もある、一概に排すべきものではない否、正欲は大に獎勵すべき欲であるが貪欲と云へば邪欲である、美味

が他へ散て居ては折角の敵も心に留らぬから特に御注意を與られたのでありませう。能く四戒を持ちて犯さざるものは今世には人に敬はれ、後世には天上即ち樂土に生ぜむ。四戒とは一には諸の群生を殺さず、二には盜まず、三には他人の婦女を愛せず、四には妄言兩舌せずである。第一に諸の群生を殺さずとは所謂不殺生戒であるが何故に生類を殺さぬかと云へば佛敎は慈悲を以て本旨とするからであります。觀經には慈心にして殺さずとあり、梵網經には、是れ菩薩は應に常住の慈悲心孝順心を起して方便して一切衆生を救護すべし、而るを反つて自ら忿なる快き意にて殺生するは是れ菩薩の波羅夷罪なり」とある故に不殺生戒の體は即ち慈悲心である。外典にも苟も仁に志せば惡なきなりとある如く慈悲に住する時は物の命を取ることではない、力の及ぶ限り人の爲に盡したいと云ふ同情心が湧き立て来る。此の慈悲心から起す所の行為は自ら道に契ひ理に相應して現れて来る。

い物が食べたいとか樂が仕たいとか働かすしてお金が儲たいとか過分の名譽が得たいとか云ふが如きは皆、邪欲であり惡欲であるから若しも斯る欲心が起つた時は早く心の駒の手綱を引きしめて制禦せよとの御誡めである。心の駒に手綱ゆるすなけれども一足づつは踏み止まれ慈と怒との世の渡り川油斷をする心猿野馬に心の良田を踏み荒されて佛果菩提の收獲を擧げ失ふからであります。是れ邪欲即ち道ならぬ愛欲、慈悲は願立つ、愚痴は道理に背反た心配苦勞之れ皆、貪欲が本である。貪欲の反對は正欲即ち慈悲心であります。親には孝が仕たい、君には忠が盡したい、人の難儀は救ふて遣りたい、人に悦びを頼みたいと云ふ、此の慈悲同情の心を以て世に立つ時は愚痴も起らず腹も立たず無理な慾望も起るべき附れがない。

然らば如何にしたならば此の慈悲心が養成し得らるかとならば大慈悲のみおやに在ます如來の御力を仰ぐより外はない。眞實法印の消息文に、「我れ佛を念すれば佛我を照し給ふ、光明我を照せば罪障消滅す」と云ふことなし。藥王經に願するものは盡なれども樂となる、光りを蒙らんもの誰か罪障残りあらむ」とある。吾れ至心に佛を念すれば佛は必ず強き力と温き同情心を以て吾等を暗黒の世界より光明の世界へ引き出して下さる。藥王經に願するものは盡なれども樂となる如く、一度樂陀の慈光に照されるれば煩惱も即ち菩提となり貪慾の心も漸次に轉じて慈悲心と入れ替て下さる。之を無量壽經には「此の光りに遇ふものは三垢(貪瞋癡)消滅し身意柔順に歡喜踊躍して善心生ぜむ」と説かれてある。此の四意を制すること能ざるものは惡名日に開えて月の盡る時に光明稍く冥きが如し。能く自ら惡意を制するものは月の初めて生ずるに其光り稍く明かにして十五日盛滿の時に至るが如し」佛の敎を信せず

偉大なる日本帝國の國是

京都市大工學部講師 中井常次郎

今や我が外交は不振なり。列國は猜疑の眼光鋭く吾視を怠らす。國內の民多く利を争ひ、不平不満にして骨肉相食ひ。俗吏と濁惡の國民の覺醒を祈念して止まず余が心中國境なし、印度の民も亞米利加之土民も皆我が同胞なり。己を愛する者は他より害せらる、道を愛してこそ障りなき相愛の實を收獲するを得るなれ。宇宙の精神は神聖、正義、恩寵なり。而して吾が日本帝國の精神は三種の神器によりて表象さる。偉大なりと云ふべし。此の國是、天體の運行、地上四時の變移、一糸亂れざるは神聖なる明鏡の大智と、正義なる利劍の勇と、恩寵なる玉の仁徳の然らしむる所なり。國治らす民苦しむ心汚るは是れ俗吏の肉我の致す處なり。又誤れる采配に雷動する自覺なき無智の民草處さらば是れ繁茂するが爲なり。醒めよ國民、肉を殺して靈に生きよ。國境を撤して宇宙の精神を己が心とせよ。而して吾が皇祖の賜ひし

佛の慈光に接せざるものは自己の罪惡を罪惡とも思はず氣儘勝手に貪慾等の慾心を恣にするから苦より苦に入り冥きより冥きに入る。譬へば十六日以後の月の光りが一日一日に光りを減するが如く遂には暗黒界に墮落することになる。其と反對に一旦如來の御敎に依り慈悲の光明に憧憬て其の光明界に至らんことを成求ふて止まざる時は常に如來の温かき慈愛の光明に照され、強き如來の威神力に牽き立てられて倍々樂より樂に入り明るきより明るきに入る。譬へば三日月の次第に其の光りを増して十五夜の滿月に至るが如く智徳圓滿の佛果に至りて、太陽が全世界を照すが如く其の圓備せる智徳を以て全世界の全人類を自由に照し照入、救ひ導くことが出来るに至るとの御教誡であります。

神器の大精神を奉じて進まば、猛獸毒蛇も道を避ひ。何を隣國民の猜疑嫉妬に對し小策を弄するに及ばんや。老子云へつ「善者は辨せず、辨するものは善ならず」と。茲に於てか此の地上の諸國民は我が大精神の前に「神器の下に」平伏し眞の平和に心安く歡喜の光を浴びて晴々として生き進歩に契ひ良民の實を擧ぐるを得む。去れど娑婆は罪惡の世界なり。而して吾人は肉我の人の子として生れたり。如來の光明は十方の世界を照して衆生を攝取し給へども、吾等は自ら煩惱の暗に没入して光明を見ず。故に盜賊根を斷たず、惡人修行するなり。哀れ信仰なき人々、諸君は眞に平安なる乎、曇りなき希望を抱けるか、根絶活動し得る乎。小我を殺して大我に生きよ。煩惱を變化して菩提心を起せ。吾れ神器の眞髓を體得せる新政府と新國民の醫生を待つや切なり。天上無窮の皇統は運轉として大和島根にいや榮えに榮ゆ。春るものは久しからず、是れ人の階級を問はず亦古今に通ず。光は東方より、上人一打の鐘の音。四海に響き、や

がて此の惑星を包みて宇宙の絶ての絶てまで波及する
日の来らんことを。

○生ける鐘

辨常

如來は無縁の大徳を垂れ給ふ。人間の愛は眼なるが故に、子なるが故に、兄弟なるが故に、友なるが故に、隣人なるが故に、相愛する。而し其の喜びを見、感謝の言葉をかけて愛して、甚しきは爲の爲に汚れたる心に慈愛を以て覆ふ。道なるが故に愛するに非ず。汚れたる時、より多きを愛せんとする利己心より生るる愛多し。嗚呼差助の愛よりなり云々云々。

彼は若葉に若き聖者である、吾が爲には生ける鐘である。絕對の親切、眞の活き流れを君の心に見る。故に如來は御姿を現じて此の若き聖者を愛し給ふ。

ほどけにも神にも人はなるものを
など仇にも己がこゝろを

消息を知ること出来ぬ、私の此の眼は見えずなり、私の眼の上に死の幕の掛かれる時、それを透して遠るか彼方に眼くらむ斗りに光り輝く神のみ國の嚴在せるを見る、そこには時間と空間の保壁は崩ざられ、星は五色に閃き樹林は波浪の如く快樂の琴を奏なげてる金山王の如き、大みをやは月のみ顔爽かに安然として中央に坐し玉ひ語の菩薩摩訶薩は雲の如くに圍繞せり……白華紛々として降る、不可思議の世界も眼を開られば依然として身は波高き前店に在り、されどこのこと庸指にならず。世に翻さるれ、世に酔はんとするとき、驚きみくにの忽然として開展し來るを見る。惡魔の微笑に溺れんとするとき、絶然として金色のみをやの高く我を招き給ふを見る。世路に悩みや旅に疲勞るとき、美しき女性の衣を覆ひて御手を我れに慰撫し玉ふを見る。我は常に彼れの招きの中にあり。

○如來の常に我を招き給ふを見る

奥村辨誠

私は二つの座敷を持つて居る。一つは駄點多き現實の店で一つは圓滿缺くるなき理想の座敷である。現實の店は波立てと、理想の室は波立たず、而かもこの二つの座敷はつねに行き通つて居る。

表の店の波高きとき私は裏の座敷に隠れて居る……否、私は裏なる理想の室に呼吸しつゝ表の店へ出て仕事して居る、我れ世の事に疲れ疲れと居るとき忽然として私の心には美しき世界が開展せられて行く、そしてそこに一度呑みて再び渴せざる生命の泉が混み混みとして湧き出づるを見る。私は常にこの生命の水を呑みつゝ世と戦つて居る。表の店と裏の座敷とは一重なる死の幕を以て仕切られて居る。故に一度死の線を突破して新しく生れ更つた者でなければこの中の

○授戒に就ての感想

大竹一

私は關東平野を遊歴して酒々を流るる利根川畔の草深き布織村に住む一青年でありました。私は業餘の餘暇に於て専ら、唯唯論の研究に没頭して居りました。倍々五里路中に入り不安の中にありました。去年の日暮村光明會青年俱樂部に山崎上人の授戒を勧められた。半ば好奇心に驅られて其席に列せられた。上人の温言に接し、御座敷を結ばしめて初めて經對の眞理を相對的人間が以て解せんとするの愚なるを自覚しました。ア私は信仰といふ心の住所を定めしめるの出来ない宿願でありました。唯々論の物欲のみ束縛せられた善無事の大體に據るこの出来ないが、恰も水中の根なし草同様生長して居るが浮世の波に瀾るのみで唯々論の根柢のない人間で居りました。省みれば現在の吾人過去の吾人、實人初めて自覚した。機に自己の罪過を知りて悔悔に於ては皆の濁流に勇むる共其進路の明確な性能の開發に精勵し光明裡の人となり、永生の目的たる階級を登らんことに心掛けて居ります。南無阿彌陀佛

これ程に密りつ持つて居る罪障を敢て頼まぬ人ぞはかなき

○入信の歡喜

埜崎省吾

私は千部印佛部遊行に生れ教會所の近きに住む一青年でありました。當教會に三日間の授戒會が助成されました。上人の願ひを聞き初めて如の活き光り顔有るを覺え、其より後、滿き慈愍の光を浴び、吾れも亦この靈氣を呼吸しつゝ佛にみまや共居るの如き心地を、樂しき生活に續けて居ります。未だ信仰の何たるやを知らざる青年は信仰といふ三へば若者の求むべきものと思ひ、余佛杯に捧ぎて、佛に憑りて居るやうであるが實に情ないと思ふ。一度上人の説教を聞き信仰し目覚めて居れば茲に無限の幸福と絶大の威力を與へられます。究、太陽の光線に依つて萬物の生長する如く、信するもの、心には常に如來の慈光に照されて、「三垢消滅し身意深潔に歡喜樂して善心平す」と經文に記されて居る如く、佛の指し洗ひ去られ、若者が覺悟して善心となり、性僻自ら改まりて善良なる人格者に育て上げ下さるる云々言はるる大無邊の御利益を受けさせて頂くこと、出来て居ります。願くは世の青年諸君と共に一日も早く信仰の門に入り、あやの靈光に接して人格の完成を期し永遠の生命と常在の平和を享けられたるがであります。

我と云はん佛と云はん
南無と云はん彌陀に來にけり一身を

精神資糧

△欲を離れぬ人は何事も云ふとも皆欲より出で、實に
かるべし。

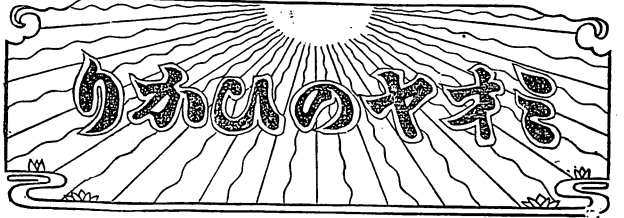
- △神人は我が神なり。我は神の人なり。(平田篤胤)
- △西人曰く、不正の業しい働かすば腐けた金錢財貨は、皆神はの恩賜に相違ない。
- △余が最大の愉快は義務を果したるの利那にあり。
- △善を爲す最も樂し。
- △汝の顔に汗して汗の汗を得よ。
- △涙と共に流すものは歡喜と共に覆らん。
- △金曜日に流すものは日曜日に泣くべし。
- △我に敵するものは我を強ふ者なり。
- △一毛も不用のものは高價なり。
- △魚を捕へんと欲する者は、濡るゝことを意に介する勿れ。
- △富貴を取つて功名を得んと欲する者は、善學難行を難する勿れ。
- △志意を達し、希望を遂げんと欲するものは艱難妨碍を忘るゝ勿れ。

○佛教信者の家憲

一、朝は早く起きて家内一同佛前に禮拜し、夜も亦一同佛前に集ひ佛祖の遺恩を感謝して寢に就くべし。

- 二、一家和合し互に相扶け相補ひ以て家業を勵行すべし。
- 三、怒り腹立ち、憎み嫉み偽り誇り杯の惡事は慎むべし。
- 四、萬事節約を旨とし一紙半銭たかとも惜之れ佛の恩物なることを信じて之を疎略に扱ひ又は無駄に費すまじし事。

誌料 一ケ部 前金五錢 郵税五厘
二ケ部 前金十錢 郵税十厘
三ケ部 前金十五錢 郵税十五厘
廣告知 五號活字廿四字詰一行(前金五拾錢) 半頁金五圓 一頁金拾圓(前納ノ事)
大正九年六月十五日發行 (二回發行)
編輯人 中村 禪定
印刷人 秋場 熊太郎
發行所 千葉縣東葛飾郡印持二丁目
光明會松戸教會所 振替東京九三三八番



號九第卷壹第

釋尊を通じて彌陀を信す

東の空に昇りてやかに照らす満月の皎々たるは、西の天に入りて人の目に見えぬ日光の反射である。

斯の地上に出まして、人類の心の靈を照す釋尊の覺りの光は、即ち西天の淨界に在りて、光明遍十方を照し給ふ彌陀無量光の反映である。釋尊は人の身を以て斯土に御出ましなされたもの、御本身は、常寂光の都に在りし無量壽尊なので一切衆生の大慈父である。故に宇宙は我が有にて其中の衆生は悉く我子と啓示しなされた。常に絶叫して一切の子等が爲に教ゆるに、一心に念佛し慈父の光明に觸れて靈に復活して現在より永恒の光明に入るべき真理を宣傳し給ふた。娑婆の舞臺に出では釋尊なれども淨界の樂屋に入りて見れば即ち無量壽如來である。

我等は釋尊の教に隨ひ、彌陀の光明に觸れ清められたる人となり、身心共に安らげ歡喜踊躍の日暮しを爲し、與られつゝある靈力を以て聖旨に契ふやう努力し、彌々命終れば釋尊の御跡を慕ふて光明永へに輝く大慈父の御許に歸り、常時常恒の慈恵に報酬し奉らん。

是れ釋尊を通じて彌陀を信じ一切の同胞衆と共に現在よりも永遠の光明に入らんと欲する所以である。

慚愧と共に編輯を辭す

中村 禪定

信なくして人を教ゆるは自らを欺き他を欺く所以なり。徳なくして人の信施を受く、之れ法賊たるべし。

願ふに不肖未だ人を教ゆるの自信なく、他の信施を受くるの徳分なし。上み菩提を求めずして下衆生を化せんとする、宛も師範校の教科を修めずして小學校の教師たらんごするが如し。嗚呼予過までり慚謝するに辭なし。

茲に於て不肖 今日より本誌の編輯を辭し教會を出て、身を行雲流水に委せ、命を佛天に捧げて専心菩提を求めんと欲す。如來の御許しを得ざる間は、口に教を説かず、手に筆を採らず、親友知己都べての音信を斷たんごを佛に誓へり。

予が畏敬信愛する讀者諸兄弟に從來の恩願を謝す。

冀くは如來慈光の許に倍々信行相續し、聖く樂しき餘生を送られんごを。至禱。

大正九年七月十五日

(2)

◎我等の教のミオヤ(續)

山崎 辨榮



○大造物主と小造物主

佛教に於ては萬物生産の起原を造物主とは説かぬけれども宗教的に一切萬物の大ミオヤなれば若し假し造物主と云はば法身の造物主の下に常恒不斷に萬物を建設し造悉し煇化し破壊し寸時も休息せぬ。何一つとして其の法則と能力との御手にかゝらぬものはない。地上の統ての生物は動物でも植物でも本、一大法身たる造物主の分身である。故に小造物物である。一切の生物は大なる親の造物物に倣ふて各造物物の作用を営んで居る。各

も心である。一切衆生の内的生活即ち心が一切生物の本源である。去れば造物主とは心である。宇宙全體が唯一の心であつて其の心から發展せられたる宇宙間に在りて無量無邊の國土ありて又無量無邊の衆生あり、此生と國土とは無量なれども其種類を分界すれば、佛敎で十法界の中に悉く攝めらる。十法界とは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛陀を云ふ。前の六界を六道と名けて生死輪廻の凡夫である。後の四法界を四聖と申して生死を離れたる聖人である。六凡四聖を合して十法界と名く。斯く十界の衆生は其の性質と相貌と體格と力量と作用とが各々別れて地獄の性は邪惡の性にて其相は劇苦間なく、餓鬼畜生乃至天上人間に至るまで其相と性と體とを別々に受けて居る。地獄の極苦天上の妙樂等六道の中の苦樂の相に又、佛菩薩等の大悟の光明の中に位するも其の根本は各自の中心なる心の本とす。其の各々の心には本、十法界の中の何の法界にも成り得らるゝ性を具有して居る、然らば本が一心が如何故に善

自の受持に造化の妙用を爲して居る、人は人の子を産み犬は犬の子を産み統ての植物は各其實を結んで種子を造りて幾萬年経ても代々其子孫を遺して種の盡きざるやうになつて居る、實に不思議ではないか殊に能く進化したる人類の如きに至つては最も巧妙に身位の各部も亦精神の働きの爲して居る。眼は視界は聴き鼻は嗅き舌は味ひ各、不思議な作用を爲して居る、是れ奇特の法と云はざるを得ぬ。

○造物主と心

異教徒は造物主と稱して居る、哲學では眞如と云ふを宗教的に云はば絕對人格の法身ビルシヤナ佛と名く宇宙全體が即ち唯一の大人格である、若し假し造物主と云はば法身は大造物主に一切衆生は小造化である大造物主が宇宙全體を作り爲して居る故に小造化の一切の生物も皆生殖的進化を爲して居る、其の造物主の主體は何であるかと云はば心である。大造化は宇宙全體の心體にて一切の個々はその内的生活の主體が即

惡苦樂の十法界の國土と衆生とに分れ來りしやとなれば之を造り出す本は心なれども之が種々の縁によりて善惡の業を造り六道の苦樂を身に受く、故に六道の苦樂の世界も善惡の衆生も心の作用の云何に依りて造り出す故に心が六道四聖十界を造り出すのである。經に唯是一心と云ふ、一切唯心造と云ふ是れなり。

若し此れを宗教的に云はば大ミオヤより出たる子等が聖意に背きて闇黒の生活をなすのが六道輪廻なので聖法界と現はれて大光明中のミオヤと共に永恒の靈福を享受す。未だ光明に接せず靈性開發せざれば靈性有りながら六道生死の中に流轉して善惡の因縁に依りて苦樂の身を受く。

善惡苦樂の六道の衆生も國土も悉く本は一心より變現したるものである故に、心は不思議である。去れば釋尊が此土に出現して教化を施し給ふ所以は此の不思議なる衆生の心も本、ミオヤの子なればミオヤの光明

(3)

に攝取せられて永遠の光明に歸入せしむるが爲めに外ならぬ。

○衆生法の不思議

佛敎の唯心哲學では心を萬法の本體としておる。大にしては宇宙全體、心靈が大造物主にして、一切個々の生物は悉く小造物主である。造物主の本體は即ち心である。心を主體として生けるものを衆生と云ふ。衆生と云ふことは心を本として斯の世界の上に立つて種々の複雑な因縁相續りて生を受けるものを云ふ。心は不思議である。心の本能に悟りて迷ひと善と惡と並邪との世界の性能が悉く具して居る、故に其が種々の因縁の如何に依て穢土と淨土の國土と善と樂との身を受ける。

宗教的に云はゞミオヤの光明を受けずして無明の六塵に流轉するを衆生と云ひ、之を心理的に云はゞ心に迷ひありて又、眞の自覺の光りを得ずして生の根本、即ち終局を覺らずして闇に生れて闇に死し只、善惡の廻り随つて苦樂の身を受け、迷の衆生に六道あり三惡

なるにあらずや。若し心なければ善惡を起す主體なし。又心なければいかなる苦樂をも感ずる主なし。心は元一つなれども善惡苦樂の因果を現じ無量無邊の衆生の身と現はれて世界を充満しておる不可思議ではないか。

一切生物界の本心一から種々無量の種類に發展しておる、不思議である。一の本より生物は無量に分れ、動物は無量と雖も、植物にも數へ切れぬ種類あり、其の因縁の縁で成る所、奇妙である。又、人間だけにても個々の相貌性質體格力量皆同じくない。世界無量百千の人、其の容貌性格一として特殊の型をなしておる。人の指紋だけさへも世界中に一人として同一の型はないと云ふ、然らば身體の所有眼や耳の官能胃や腸の機能、何れの處に亘りても決して全分同一型はない。是れまた衆生の不思議ではないか。

道と三善道となり。三惡道とは惡に三品あり、上品の惡を造りて最も激苦極まりなき極熱の火に燒かれて苦しむを地獄と云ふ、火に燒かるゝ苦あり故に火塗と云ふ。中品の惡を以て常に飢渴の苦しみを受く、刀を以て裁割せらるゝの苦あり故に餓鬼道を刀塗と名く。下品の惡を以て常に弱きものは強きに啗るゝの苦を受く血を流して苦を受くものゝ畜生道を血塗と云ふ。之を三惡道と云ふ。下品の善を以て憍慢心強く勝他を念厚く名譽の爲めに善を爲し、誇らんが爲に徳を毀したるもの修羅道に落ち常に闘争を事し、只、負ひんことを怖れ取捨して安き時なきは修羅道である。中品の善、常識を備ひ人格を全し人道を履み行ふものは全人間にして、又更に人間に身を受くべきである。最上品の善を以て公明正大、博愛仁慈なるは天道的にして天上最勝の果報を受くべし。心一つの善惡邪正の運動の如何に依て獄火の中に激苦を成じ、又は美天國に於て勝妙の樂果を享く。心が六道の元因にして其の心の中に苦樂の花咲き淨穢の果を結ぶ、實に不可思議

又、生物進化の理に於ても原始的のアモンバ底の微粒の生物より無數の階段を経て遂に人類にまで進化せしと云はゞ其の始めの微少の細胞の中に進化すべき伏能を有つて居つたと云はねばならぬ。其の無數階段を僅か胎内十月にて操かへすと云ふ。人の始めて妊娠したる一微粒の種子が卵子中に一人の身體各部四支五官よりして解剖學や生理學にて説明しておる、非常な複雑極めたる一切の全部を伏藏して居つたと見なければならぬ。是又、衆生法の奇なる理法にあらずや。

微粒の種子に世界を震動せしむるやうな人傑と成り得べき伏能を有し、又極微少な植物の種子核の細胞に大きなニクイ樹を發展するが如き實に衆生法のごとく議論なり。又、生物の遺傳性は極微の細胞中に伏藏して其の種族を百千代に傳へてはらし。

衆生法が生物の本、同一の原始生命より出て動物と植物との兩界に分れ動物中にも數多の種類あり、階段あり。植物にも幾多の種類あり、科あり、斯く無量に分れ出づる是、生物理法のごとく不可思議である。又、衆生の内的生命の心なるものに至つて更にまた不思議である。心を本として善惡の云何より三善道三惡道の苦樂の身を受く、是れ不思議なり。唯、涅槃常樂世界の微妙なるにあらず。心が變じて阿鼻焦熱の炎と現じ、天上勝妙の樂界と成す。是れ皆、心を本としての衆生法のごとく議論ならざるはなし。

衆生は本、ミオヤの絶妙界に入るべき性を有しながら六道生死の不思議の若を感ず。之を衆生法と爲す。

佛法不思議

若し哲理に云はゞ心を本として迷ふ時は六道生死の苦を受け、悟る時は常位涅槃の妙樂を受く。

宗教的に云はゞミオヤの光明に遇はずして愚蒙の衆生ミオヤに背きて自ら生死に流浪す。ミオヤの光明に遇ふ時は靈覺復活し聖意に稱ふ人となりて現在より永恒の靈福を蒙る。

佛の三身の中にも法身より受けたる衆生なれば靈性を具有すれども又、報身の光明に接觸せざれば靈に活きることはできぬ。故に靈性が伏能として衆生法に現に活くべきである。活ける佛法に遇ふことを得たるは實に幸である。

彌陀の光明に觸れて佛法不思議を知り給へ。此より脱明する所は報身の不思議である。(未完)

◎靈に生さんと欲する念佛

佛 陀 禪 那

念佛は絕對的に尊ぶべき如來の御名を稱えて救ひを求むる所の心行である。大ミオヤの本願にて十方の衆生に至心に信樂して我國(光明中)に生さんと欲して我を念せよ、若し生せずば正覺を取らじ。との御誓に對する衆生の信仰心である。

然るに宗教的要求する所即ち、信仰の目的は幼稚なる人ご高等に發達する人とは必ずしも同一でない。我が日本國民が佛敎東漸の當時より現代に至るまでの文化の程度も漸々に進歩し知識も發達し來り。故に國民の信仰の目的も時代により機械相應とか機教相應とか云て居る、其の時代と又種類の知識と信奉する宗教とが平行せねば程よく行はれぬと云ふ意味である。

人の知識の程度が低く宗教の教理が高ければ手が届かぬ、故に信心の手を以て之を取つて我が有とすることか出來ぬ。又知識の高き人に教理が除り低ければ、あきたらぬ感じがして全生命を犠牲して信仰せんと欲する意志が起らぬ。故に信心の要求を満足する所の念佛が時代に依り機械に隨つて目的を殊にして種々の方面に用ひられておる。吾が國民に行はれし佛敎の中に此の念佛の行はれしことを三期に分ちて云はゞ、平安朝と鎌倉時代より現代に至るまでは文化の幼稚なる時代に國民の要求する宗教は逆も高遠なる理想や遠大なる希望の宗教ではない、國民の思想が幼稚なる故に唯、肉體に現世の幸福を獲んと欲する所から宗教の必要を感じ、現世利益を目的とするの信仰であつた。されば親鸞上人の現世利益和讃にも、山家の傳教大師は、國民

「質疑應答欄」
小島 静 知
「(一) 法身てよ絶対人格——私共は絶対人格者の實在を信じ、歸命せんとす。然し法身を人格者と見る事は如何。」

「(二) 其の客體たる本尊は絶対なる人格と信せざるを得ぬ。既に客體と云ふ以上は其の絕對は相對に對する絕對の様に思はるゝが如何。」
「(三) アナタの恩寵は一切の所に充滿するを感ぜざるを得ぬ。我等は大ミオヤの如來藏なる胎内より産み出されたる子である——私もしかと思ふ。然し如來藏より出し我等が何故如來を歸命すべきか何故如來の救済を仰がざるべからざるかの我等に惡あるに依るごせんか。然らば何故に我等に惡あるか。業か。其の業の最初は何か解らぬ故に然るべしとせば、然かと思ふ方が都合が宜いからか。御都合主義では物足らぬ様思はるゝが如何。」
「(四) 無限者に對しては只——無限者の實在は直ちに人格的に見ざるも可ならむ、唯人格的に見る方、吾人に力ある様思はるゝ故に然るか。」
「(五) 宇宙全體は精神であつて物質である——宇宙は物心二元を統一するの謂か、然らば如何にして二に分れしや又、物心二元對立とせば性質の全然異なるものに變化するとは考られず、此の説明、實弱なる私の頭腦に入り難し。徹底御説明を乞ふ。」

◎面山和尚の信施論を讀んで泣く

中村 居士

讀者諸君の御一讀を乞ふ。
竊に以れば信は入佛の初門にして施は六波羅蜜の第一なり。僧家の常に念じ深く觀すべきもの専ら此にあり。夫人の世に産るゝ亦一體一糸を掛けず、空手一粒を握らず。只父母の勸勞に係つて成立に至るのみ。宿因善惡あり、現果貴賤を分つ。四民の區別に至つては、士を食むものは節に臨んで一命を君上に奉じて安堵し難し。農の稼穡に食むものは春夏泥に入り晨昏汗を流して以て秋熟を待つて之を官倉に納め少しく其の餘を得て妻を養育するなり。工の百器を製するに晝夜兀々として分陰を捨てず。燭を點じて夜に繼ぎ生運動力で其の價を得て以て渡世するなり。商は類を以て分る。山に斧し海に船して苦辛命に代ふ。之に由て之を概は士農工商四民渡世、未だ一箇も手を拱して自ら飽くものにあらず。彼が爲に其の艱難を憶へば則ち腐粟憐々として寒毛卓立す。嗚呼恐れて且つ怖れざるべけんや。
宋の太宗謂く朕れ衣を著る毎に蠶婦の勞を憶へば則ち身冷にして温かならず、食に向ふ毎に以て農夫の勞を

「(一) 質疑應答欄」
小島 静 知
「(二) 其の客體たる本尊は絶対なる人格と信せざるを得ぬ。既に客體と云ふ以上は其の絕對は相對に對する絕對の様に思はるゝが如何。」
「(三) アナタの恩寵は一切の所に充滿するを感ぜざるを得ぬ。我等は大ミオヤの如來藏なる胎内より産み出されたる子である——私もしかと思ふ。然し如來藏より出し我等が何故如來を歸命すべきか何故如來の救済を仰がざるべからざるかの我等に惡あるに依るごせんか。然らば何故に我等に惡あるか。業か。其の業の最初は何か解らぬ故に然るべしとせば、然かと思ふ方が都合が宜いからか。御都合主義では物足らぬ様思はるゝが如何。」
「(四) 無限者に對しては只——無限者の實在は直ちに人格的に見ざるも可ならむ、唯人格的に見る方、吾人に力ある様思はるゝ故に然るか。」
「(五) 宇宙全體は精神であつて物質である——宇宙は物心二元を統一するの謂か、然らば如何にして二に分れしや又、物心二元對立とせば性質の全然異なるものに變化するとは考られず、此の説明、實弱なる私の頭腦に入り難し。徹底御説明を乞ふ。」

讀者諸君の御一讀を乞ふ。
竊に以れば信は入佛の初門にして施は六波羅蜜の第一なり。僧家の常に念じ深く觀すべきもの専ら此にあり。夫人の世に産るゝ亦一體一糸を掛けず、空手一粒を握らず。只父母の勸勞に係つて成立に至るのみ。宿因善惡あり、現果貴賤を分つ。四民の區別に至つては、士を食むものは節に臨んで一命を君上に奉じて安堵し難し。農の稼穡に食むものは春夏泥に入り晨昏汗を流して以て秋熟を待つて之を官倉に納め少しく其の餘を得て妻を養育するなり。工の百器を製するに晝夜兀々として分陰を捨てず。燭を點じて夜に繼ぎ生運動力で其の價を得て以て渡世するなり。商は類を以て分る。山に斧し海に船して苦辛命に代ふ。之に由て之を概は士農工商四民渡世、未だ一箇も手を拱して自ら飽くものにあらず。彼が爲に其の艱難を憶へば則ち腐粟憐々として寒毛卓立す。嗚呼恐れて且つ怖れざるべけんや。
宋の太宗謂く朕れ衣を著る毎に蠶婦の勞を憶へば則ち身冷にして温かならず、食に向ふ毎に以て農夫の勞を

◎尼港遭難者追弔會

我が國有史以來の悲慘事たる尼港遭難犠牲者の靈を慰むべし。目下各方面に於て之が追弔を營まらざるも、なるが新潟縣長岡市法藏寺に於ては六月二十四日光明會主催の下に盛蕩なる追弔法會を營む。會員一國燒香回願念佛して散會せしは午後の四時なりとす。

◎唐澤山の御別時

來る八月十八日より一週間、信州上野郡唐澤山阿彌陀寺に於て山崎上人、唱導の許に別時念佛三昧會を修すべく、各地の有志諸兄弟は此の勝緣に御參加あらせらるべく、特に御勤め申上ます。御參加相成る方は八月十五日迄に當唐澤山阿彌陀寺へ宛て御申込下されたし。

感ずる時は則ち舌苦して甘からず。世俗萬乘の君すら向は是の如し、況んや出家沙門は四民の外に逃れ、衣食住處皆四民の信施を用つて安樂なり。其の信施する所以は何ぞや、彼れ悉く先亡の幽魂を責け、兼ねて其身の功徳を祈るなり。嗚呼信施と云ふべき哉。是故に如來衣に入りて托鉢し、遊業糞掃を拾ふに衣袋に入るを乞ふし、列祖樹下石上に居するは住を乞ふなり。然して其の佛と祖との行持、只光陰を惜んで三學欠かず遺教八大人覺徳を著るべし。若し一日行持を欠かば則ち一日價めを負ふ、憶はざるべけんや。所以に百丈曰く一日作さざれば一日食はざる、是れ眞語實言なり。熱業するに今日の家門沙門に於ては則ち晨夕粥飯臘味を欠かず、衣に於ては則ち寒暑厚薄炎冷に苦まず、住に於ては則ち坐に間席あり、綿褥を覆き、來處を原るに則ち皆是れ四民苦難汗血經營に較量し算計して宜しく斤價低昂如何と視るべし。已れが徳行の全缺を付つて供に應ず。是れ之の謂なり。嗚呼日本自宗他宗皆爾り。中に就て吾が禪門の如きは則ち教外別傳を認解するもの聞これあり。彼の當互に聞らば戒行戒法は律儀に關する別傳宗何を用ん

是れはどによりつとつれつする彌陀を
あいて頼まぬ人ぞはかなき
雲はれてのちの光りと思ふよ
私しを離れて見れば心はど
明るきは世になかりけり
月やわれ我や月かど分のみ
こゝろは空に澄みわたるらむ
天地にありとあらゆる物事が、走りつ向ふ目標こそ、
遠き未來にかけ給ふ、神の妙なる攝理なれ。
大正九年七月十五日印刷
發行所 中村 禪 定
印刷人 秋場 熊 太郎
發行所 光明會松戸教會所
振替東京四三三八番